

研究課題名：小学校児童における投と打及び捕能力の発達－全学年を対象として－
研究代表者：滝沢洋平

現行の小学校体育の学習指導要領の「ゲーム(中学年のみ)」「ボール運動」領域の内容は、ゴール型、ネット型、ベースボール型という3つの型で示されており、中でも、ベースボール型については、「ボール操作」の指導が重要であり、例示されているソフトボールやティーボールを指導していく上でも、投げる、打つ、捕るといった基本的な動作の指導は重要であるといえる。特に投げる動作(以下、投動作とする)と打つ動作(以下、打動作とする)に関しては、生涯スポーツの視点からも、継続的に指導がなされるべきものであるといえる。そこで、これまでの両動作に関する先行研究をみると、両動作ともに、各学年段階の特徴を明らかにした研究や、それらの動作の習熟度を質的に評価するための尺度や評価基準に関する研究がいくつか行われ報告されてきた。しかし、先行研究であげられている評価法には、いくつかの課題が存在した。

そこで、本研究の目的は小学校児童の投動作と打動作の実態を明らかにする上で、新たに両動作の観察的評価基準を作成し、その妥当性、信頼性及び客観性について検討することである。その際、作成する観察的評価基準の文言において、観察評価する身体部位の動きの描写を詳細にすることとした。

なお、本学術研究補助費を受ける際には、小学校児童の捕動作の実態も明らかにするために、捕動作の観察的評価基準を作成することも目的としていたが、研究の全体的な方向性として、捕動作に関しては今後の課題とすることとさせていただく。

本研究の対象は570人の児童(男子:304名、女子:266名)で、ソフトボール投げと打撃の技能テストを実施した。データは、ソフトボール投げの遠投距離、投動作の得点、ペットベースゲームの得点、打動作の得点の4つから分析した。試技の回数は、ソフトボール投げは2球、ペットベースゲームは3球行い、記録の高い試技を分析の対象とした。また、記録が同じ場合は、動作得点の総得点が高い試技を分析の対象とした。なお、動作撮影においては、ビデオカメラ(HDR-CX560V、SONY社製)を使用し、毎秒60コマ、シャッタースピードは1/250秒で固定撮影した。加えて、両動作の撮影は、側方から行い、ソフトボール投げと打撃の技能テストの様子の撮影は、校舎の3階から行った。

本研究における両動作の観察的評価基準は、先行研究の評価法を参考にしつつ、対象となった児童の動作を文字化し、評価項目や文言を設定する際の基として作成した。

作成した観察的評価基準については、妥当性、客観性及び信頼性を検討する必要があることから、本研究でも同様に検討することとした。その結果、本研究で作成した両動作の観察的評価基準は、一定の妥当性、客観性、信頼性を持つことが示された。なお、投動作の観察的評価基準については、先行研究において比較できる対象が存在したことから、本研究の評価法と先行研究の評価法を比較したところ、本研究で作成した評価法が統計的に優れていることが明らかとなった。

ただし、これらの評価法は、現時点で複雑であり、小学校の教員が使用するには難しい。そのため、小学校の教員がこうした新しい評価法を使用して動作を分析するには、簡易化が必要であると示唆される。